

平成22年度 第4回 CCC 芸術系グループ運営委員会 議事概要

I 日時：平成23年2月28日（月） 午後4：30～午後6：30

II 場所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III 出席者：有馬委員、西垣委員、井澤委員、小川委員、久原委員、宮田委員

（事務局）井端事務局長、森下主幹、松本職員

IV 議事概要

1. 事務局参考資料

事務局から以下の参考資料についての説明があった。

- 参考資料1 『「知情意の総合力」育め』（日本経済新聞 2011 年 1 月 10 日）
- 参考資料2 『大学授業も対話で白熱』（朝日新聞 2011 年 1 月 31 日）
- 参考資料3 『今、求められる力を高めるための学習指導』（文部科学省 2011 年 11 月）
- 高等教育におけるキャリア教育・職業教育

2. 検討内容

今回の委員会の目的は、検討してきた「美術・デザイン学教育における学士力」を実現するための「ICT を活用した授業モデル案」を、委員から提案されたモデル案を元に検討し、まとめることである。まず、以下の方針を確認した。

- 15 週完結でなく、4 年間を通し学士力を実現するための教育モデルを提案する。
- すべて ICT を使う授業ではなく、全体の教育モデルを提案する中で、どの部分に ICT が有効であるかを見極め、その部分での効果的な使い方について提案する。
- モデル授業なので、こうしなければならないというものではなく、コンセプトや目的を明確にした上で、実際の展開は各大学の事情に合わせて柔軟に考えてもらう材料となるような提案を行う。
- すぐ実現可能ではなくても、5 年後に実現できることを目指す努力目標のような授業を提案する。

これらを踏まえて、以下のような議論を行った。

- 暗記型の学習や単位取得が目的の学びが多く、本質的な学びができていないことが指摘され、グループ学習や協働で研究することが効果的ではないかとの提案がなさ

れ、グループで話し合い、協働作業をすることで、新しい発見ができるような授業モデルを検討することが議論された。

- 単位取得が目的の学習でなく、学びを通して学生たちが社会に出た時にどのように社会に関与できるかを学ばせる。そのために学生に学習成果を社会に発信させることが効果的ではないかなどと、グループ学習を中心に、社会に発信できる授業モデルについて議論した。
- 大学生の学びの結果を社会に出して評価を受けることで、モノを通して社会を理解し、モノ作りを通して社会に発信し貢献する学びにより、社会を自分たちの力で変革する力をつけるような授業モデルについて議論した
- 造形美術の分野では、スキルアップのために ICT を利用するのは難しいが、データの蓄積により外部評価を受けたり、他人の作品を鑑賞したり、自分の作品をアーカイブして見直す方法としては有効である、との議論があった。
- 学生に学習を持続化するモチベーションを維持するためにも、学生をサポートする組織の必要性について議論した。学びを促進するファシリテータが下級生をサポートすることで、上級生もリフレクションできるという学び合いが重要である。
- 情報倫理、著作権についての教育も重要であるという指摘があり、知識・技術を持っているだけでなく、それらを社会的文脈の中で適切に使うことができるような、広い視野を持って制作できることの重要性について議論した。教育の場では、著作権として管理するよりは、自分たちの作品をオープン化して社会に使ってもらい、社会的な認知が得られる体験が重要との意見もあった。
- 委員から提案された授業モデル案について、意見交換を行った。モデル案については、大学院教育は除くこと、具体的な授業シナリオの例示をすること、ファシリテータの役割について触れること、などの修正意見があった。

3. 今後のスケジュールについて

3名の委員が、再度授業モデル案をまとめることになった。各委員の意見等をメーリングリストに送り、作成担当者の委員が送られた意見を踏まえて、3月18日(金)までに一度まとめ、その案を各委員が確認して、必要なら修正し、最終案として3月28日(月)までに事務局に提出することになった。